

関係性における暴力と対話による修復 ～教育と支援を再考する～



研究室紹介

野坂 祐子*

Violence in Relationships and Restoration through Dialogue
- Rethinking Education and Care

Key Words : Trauma, Trauma Informed Care (TIC), Therapeutic Community (TC),
Circle, Restorative Justice (RJ)

はじめに ～「すぐに丸くなりたがる研究室」～

本研究科では、学部回生の秋から研究室に配属される。2023年7月現在、3回生以上の学部生と院生は28名在籍しており、助教の阿部望先生（本誌第75巻、第2号に寄稿）と共に運営している「教育心理学研究室」は、学生の間では「厳しい研究室」と評されている。課題図書も多く、3回生は1年間に2本のグループ研究を行なって翌年の卒業研究に備えるため、自習や作業に相当な時間をかけることになる。それでも、本研究室（教育心理学を略してキョウシン）への配属や大学院進学希望者が少なくない理由は、研究室運営の基盤としている治療共同体（Therapeutic Community: TC）と呼ばれるグループアプローチにある。

進学希望者に〈どんな研究室か？〉を問われた院生は、こんなふうに応答していた——「ここの人たちは、すぐに丸くなりたがるんだよ」。何か疑問やアイデアが浮かぶと、いや浮かばないときこそ、日常的に「輪になって話す」のがキョウシンの文化だという。この「丸く」「輪になって話す」のが、キョウシンの学習と絆を深めるサークル（circle）であり、仲間同士で回復を支え合い、成長を促す関係性の基盤となるのだ。

教育心理学という学習や動機づけに関する学問を

なぜ、TCの手法を用いながら取り組むのか。そして、サークル体験を通じた自立や成長の可能性について紹介したい。

教育現場での「関係性」に課題をかかえる子ども

教育心理学の研究分野は、測定・評価、発達、人格・適応、教授・学習の4つに分けられる。人が育つなかでのあらゆる経験を「学習」といい、個人の特徴や反応性を理解しながら、成長や発達を支える学習のありかたを考える学問である。学校教育での「勉強」に限らず、「他者とともに生きること」の学びであるため、従来から、教育者と学習者との信頼関係を基盤に、学習者の動機づけ、学習方略の獲得、社会適応と幸福な人生などが扱われてきた。

ところが近年、こうした学習そのものが困難であり、学校への適応どころか日常生活の安定すら損なわれ、「関係性」に課題をかかえる子どもたちが増えている。教育者との信頼関係や世界への関心は、基本的信頼感を形成するアタッチメントに根ざす。しかし、幼少期の虐待やネグレクト、家族の機能不全といった逆境的環境で育つ子どもは、養育者とのアタッチメントによる安全や安心が得られず、恐怖や不安、混乱や無力感を抱いている。子どもにとって「関係性のなかでの学習」とは、人は信用ならない、世の中は危険である、自分には価値がないといった信念と、力関係のなかで生き延びる術を身につけることにほかならない。

教育の前提となる安全や信頼、自信が揺らいでいる子どもは、教育の場には適応しにくい。彼らはしばしば「問題児」や「非行少年」とみなされ、学校や地域から排除されてきた。「関係性」においてトラウマを負った子どもと関係性を築くことは難しいため、教育者も傷つき、無力感にとらわれてしまう。



* Sachiko NOSAKA

1974年1月生まれ
お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 人間発達科学専攻 博士後期課程単位取得退学(2004年)、大阪教育大学の勤務を経て、現在、大阪大学大学院 人間科学研究科 臨床教育学講座 教育心理学分野 教授 博士(人間学)、公認心理師・臨床心理士 専門/臨床発達心理学
TEL : 06-6879-8104 (研究室)
E-mail : nosaka@hus.osaka-u.ac.jp
研究室 : <https://kyoshin.hus.osaka-u.ac.jp/>

トラウマインフォームドケアという視点

教育の現場で生じている暴力のサイクルから抜け出し、子どもも教育者も安全な関わりをもてるようにするのに有益とされるアプローチが、トラウマの影響を理解して関わるトラウマインフォームドケア (Trauma Informed Care: TIC) である。トラウマとは、災害や事故、犯罪といった生命の危険を伴う体験だけでなく、虐待やネグレクト、いじめや性暴力など、不信感や羞恥心に苛まれる体験も含む。筆舌に尽くしがたい苦しみは、文字通り、言葉にならない恐怖や混乱として身体面や行動面に表れやすい。

恐怖による落ち着きのなさ、不信感による対人トラブル、自己否定感による自暴自棄な態度は「問題行動」に見えやすく、叱責や非難を受けやすい。教員が一般的に有効とされる教育的介入 (ほめる・トークン等) をしても、功を奏さないことが多い。TIC は見えにくい子どもの内的状態を知る手がかりを与えてくれるものであり、教育現場において再トラウマを与えてしまう不適切な対応を防ぐのに役立つ。

家庭や学校などの子どもの身近な生活環境のなかには、トラウマとなりうる暴力や逆境が少なくない。トラウマが子どもに及ぼす影響を包括的に理解したトラウマインフォームドな教育のあり方を考えていく必要がある。

修復的な対話を通じた回復と成長

TIC はトラウマ症状に焦点をあてた心理療法や医療ではなく、だれもが日常生活を安全に過ごすための公衆衛生のアプローチである。つまり「問題行動」を心身の不調のサインとして捉え、「問題がない」と看過されやすい過剰適応 (イイコ) の背景にあるかもしれない不遇な環境に目を向けることで、問題を悪化させない基本的な援助姿勢をいう。

「関係性」においてトラウマを負った人は、「関係性」のなかでこそ癒される必要がある。恐怖が「安心」に変わり、不信が「信頼」になり、自分と他者をもう一度、信じられるようになることで、人はトラウマという裏切りによる絶望から立ち上がることができるからである。

そのためには、安全な環境と関係性が欠かせない。公衆衛生の視点に立てば、誰もが暴力と無縁ではない。暴力を体験したり、目撃したり、暴力をふるう

側にもなりうる。また、トラウマは個人的な体験に限らない。戦争や大災害、差別といった歴史的な負の遺産を解決せぬまま、その影響を次世代に引き継いでいる社会の課題も大きい。

こうした潜在的なトラウマは、教育にも影響を及ぼす。「言ってきかないなら暴力もやむなし」「痛い目を見れば懲りるはず」「体罰も必要」などの子育てにおける暗黙的な信念は、暴力を「教育的」に用いることにつながる。威圧や支配で抑え込むことで、恐怖と不信は強まる。そのため、安全な環境と関係性には、あらゆる暴力を手放すことが前提となる。

暴力を「被害-加害」の二者関係で捉え、加害者を罰して終わりにするのではなく、「傷ついたのは誰か」「傷ついた人たちのニーズは何か」を問い、コミュニティの傷つきと責任も含めて、社会全体の回復と正義を目指すのが修復的正義 (Restorative Justice: RJ) である。権威者の「裁き」による解決ではなく、関係者が皆で「責任を分かち持つ」ことで葛藤解決を図ろうとするものである。

RJ の手法の一つが「上もなければ下もない (対等性)」を体現するサークルである。「丸く」「輪になって話す」ときに求められるものは、正解や付度ではなく、多様な声を受け入れる寛容さと正直さ、互いから学び、支え合う姿勢である。このような民主的な話し合いと育ち合いの場づくりは、前述した治療共同体 (TC) の理念とも重なる。トラウマを理解する TIC は、TC の実践からも発展したアプローチであり、TIC と RJ、TC は親和性が高い。

もともと教育現場、ひいては私たちの社会は「互いへの思いやり」と「一員としての責任」を重視してきたはずだ。思いやりは、お互いの理解から生まれる。そして、お互いに応答する (respond) のが責任 (responsibility) である。修復的な対話が集団の理解と責任につながり、相互に支え合う健全な依存関係がメンバーの自立と成長を促す。

おわりに ～個人の成長と社会の変化をめざして～

社会のさまざまな信念や価値観を問い直し、教育や支援のあり方を再考するには、一人で考えるだけでなく、対話による他者との出会い、そして自分自身との新たな出会いが大切である。〈気づき〉は痛みを伴うものであり、〈変化〉は喪失体験でもある。大学生生活は学問に取り組むだけでなく、自分自身に

向き合う時期であってほしい。

そのとき、〈ともにある〉仲間がいることは大きな力になる。TCやRJといった概念を頭で学ぶのではなく、体験から感じとり、自分自身に活かせるなら、やがて臨床家としてクライアントと〈よい関係性〉を築けるだろう。教員である私もサークルの一員であることは、権力を悪用しないための安全弁になっている。もちろん対話を通して多くを学べる。

研究室のさらなる進展に向けて、運営の指針にしているアフリカの諺を引用して終えたい。“暴力のない社会”を実現するという遠くまで、みんなと行けますように。

早く行きたければ、
一人で行け。
遠くまで行きたければ、
みんなで行け。

(右図 研究室のサークルルーム)

